

ケータイ小説コンテスト～23STORY NEXT～

停くて幸せな時間 晴海十



登場人物

○高月 愛希 (たかつき あき)

○渡辺 達弥 (わたなべ たつや)

○川瀬 千紘 (かわせ ちひろ)

3人は幼なじみ。

小中一貫校に通う中学3年生。

3人は仲良しでいつも一緒だった・・・

いつもの朝

私の名前は高月愛希。
小中一貫校に通う中学3年生。

今日もポカポカとした陽気の中、バス停の前で待ち合わせ。
長年お世話になっている制服は、もうすっかり体になじんでいる。

「愛希——！！」

この元気な声を合図に、私の1日が始まる。

彼——渡辺達弥は私の幼なじみ。

小学校の時は背の順で一番前が恒例だったのに、今や同じ学年の男子の中でもひとときわ背が高い。
いつでも明るくてニカッと笑う笑顔が印象的で、達弥の周りには気づけばみんなが集まっている。
短く整えられた黒髪から風が吹いたときにスツとする涼しげなシャンプーの香り。
それは、いつしか私にとって落ち着く匂いになっていた。

小学生の時から私たちはいつも一緒に登校していた。

達弥がバス停に着いたと同時にやってきたバスに二人で乗り込む。
片道20分というとても短い時間。

たった20分。されど20分。
他人から見ればほんのちょっとの時間。
でも、私にとっては、とても大切な時間。

大好きな彼を一人占めできる唯一の時間だから・・・

いつもと同じように、後ろから二つ目の2人用座席に座ってバスに揺られながら学校へと向かう。

コテンと肩にかかった重みに顔を向けると、達弥が私の肩に頭を預けて
スースーと規則正しい寝息をたてていた。

こうやって座っているとカップルみたいに見えるのかな。
バスケの試合のときの真剣な目つきとは違って、こんな無防備なところもある。
小さい頃は意識したことなんてなかったけど、自分でも驚いている。
一緒にいる時間が重なるたびに少しずつ・・・少しずつ達弥を好きになっていることに。

今では当たり前のように座っている2人用座席。
こうやって達弥と並んで座ることは少し前までほとんどなかった。

だって前までは、ここに千紘もいたから。

もう一人の幼なじみ

もう一人の幼なじみ・・・川瀬千紘。

小学校の頃から3人で一緒に毎朝登校していて、だいたい私と千紘が並んで座ってた。

肩より少し下まで伸びた髪にスラッと背が高くて、実際の年齢よりも上に見られがちな千紘。昔から私達二人のお姉ちゃんみたいな存在だった。

悪ふざけする様子をいつも微笑んで見ていて、たまに叱ってくれる。

親と喧嘩したときは泣きながら千紘に電話したりして、いつも頼ってばかりだったっけ。

今、この光景の中に千紘はいない。

でも彼女は死んだわけではない。

そう。あれは半年前のこと。私たちがまだ中2の時。
涼しい秋が終わり、凍り付くほど寒い日が増えてきた頃。

その日も北風が冷たくって、体が凍てつくような寒さだった。

千紘の家の前に集まった私たち3人は、みんな暗い顔をしていた。
家の前には一台の大きなトラック。
その後ろには空っぽになった立派な一軒家。

「千紘・・・本当に行っちゃうの・・・？」

「うん。アタシは行きたくないって言ったんだけど・・・」

そう言って悲しそうに笑う千紘。
彼女は親の都合で引っ越すことになった。

ずっと・・・3人でずっと一緒にいられると思っていたのに。

「千紘は体細せえんだから、ちゃんと飯食えよ？」

「「オカンかっ！！」」
思わず千紘と声が重なる。

「お！ハモってる～息ピッタリだな、お前ら。」

なんだかふいをつかれたみたいで、3人で声をそろえて笑った。
少しだけ、重い空気が和んだ気がした。

その後も他愛のない話を続けた。
時間を惜しむように。
・・・離れたくない。

その想いとは裏腹に時間は無情にも進んでゆく。

「千紘」
車の中から千紘の両親が彼女を呼んだ。

「じゃあ・・・もう行くね??」

私は寂しいと思う顔を隠しきれなかった。

「もう・・・愛希、また会えるんだから。そんな寂しそうな顔しないの！」

笑って私にそう言う千紘。

いつだって千尋はしっかり者だ。

こんなときでも。

「・・・うん。」

「よし。」

ぐるりと私たちに背を向けて、足を踏み出して車へと向かおうとした。

そのとき・・・

二人のはじまり

「千紘!!」

私の隣に立っていた達弥が突然千紘の元に駆けだし、パシッと彼女の手を取った。

「たつ、や・・・？」

何？どうしたの？

「俺・・・俺ッ!!千紘のことが好きだ!!」

「「っっ!!!」」

3人の間に静寂が訪れた。

「ふっ・・・うっ・・・」

最初に静寂を破ったのは千紘だった。

ポロポロと大きな瞳から涙をあふれさせていた。

「え、な・・・何泣いてんだよ！・・・そんなにイヤだった、か??」

達弥の顔が曇る。

「う、ううん。・・・ただ嬉しくって。うっ。アタシも・・・ずっと・・・好き、だったの・・・」

ふわりと笑う千紘に達弥は顔を赤らめた。

私はただ、その光景を呆然と、空気のように眺めていることしかできなかった。

私も好きだったのに・・・
でも、伝えられるわけなくて。

そのまま千紘は私たちの前から去っていった。

魔法の時間

それ以来、千紘と達弥の遠距離恋愛はまだ続いている。

千紘が引っ越したその日から、私は達弥への想いを伝えることを諦め、封印することに決めた。それと同時に、私と達弥だけの、2人っきりの時間が始まった。大好きな彼と、誰にも邪魔されない時間。

たった20分だけの魔法。

ずっとこの時が続けばいいのに・・・

だって、この魔法の時間が過ぎてしまったら、私は達弥の幼なじみに戻らなくちゃいけないから。



「愛希、帰るぞー」

「あ、うん。ちょっと待って」

放課後。
教室まで迎えにきてくれる達弥と帰るのも日課の一つ。

でも、この日はいつもと少し違った。

「愛希、この後暇か？」

「え・・・？」

達也に連れてこられたのは、最近よくテレビで特集されるオシャレなショッピングモール。今流行のファッションを扱うお店が所狭しと並んでいて、エスカレーターで地下に降りるとファーストフードやお洒落なカフェが入ったレストランフロアがある。

いわゆるデートコースで行くような場所。

周りもすれ違うのはカップルばかりで、こんなところに達弥と二人っきりでくるなんて緊張する。

「これすごい可愛い！」

「どれ？」

「これこれ!!」

着いてすぐに2人で入ったのは可愛い感じのアクセサリーショップ。

いつもの予定にはない特別な時間。
嬉しさと緊張がゴチャゴチャに混ざり合って戸惑う。
その戸惑いを隠すように、店内をうろうろと歩き回る。

ペアリング

「あ・・・」

ふと目に入ったペアリング。



シンプルだけど小さな石がライン状についていて、すごく、可愛い。

達弥と付けられたら、どんなに良いだろう。
きっと似合うと思う。

「愛希??」

「っわっ・・・」

すっかり自分の世界に入っていて、近くに達弥が来てることに気づかなかった。
突然声をかけられたせいで、引きつった声が出てしまった。

苦笑する達弥をみて、恥ずかしくて顔が赤くなってしまった。

達弥は笑うときに、いつも眉間がちょっと上がる。

昔から変わらない癖。

笑った瞬間にかすかにするシャンプーの香り。

こういう一つ一つが私だけのものになればいいのに・・・。

「何か良いのを見つけたか？」

「!?・・・えっとね～」

ペアリングをちらっと見てみるけど、すぐに目をそらした。

・・・達弥には千紘がいる。
隣にいるのは千紘で、私じゃない。

私は咄嗟に隣に置いてあった鍵のモチーフのネックレスを指さした。

「これなんかどう？」

「ん?・・・お。それ愛希に似合いそう。」

「本当？」

「おう。ホントホント。」

やめてよ・・・。
そんなこと言われたら照れちゃう。
顔が赤くなる・・・。

気まずくなって、腕にはめた時計を見ると、針は既に6時を指していた。

「あ、もう6時だ・・・」

「もうそんな時間か。・・・ちょっと待ってて。」

一瞬だけ何かを考えるそぶりを見せたかと思うと、達弥はレジへと向かった。
・・・手にペアリングを持って。

胸が期待で膨らむ。

「ごめん。待たせちゃって。」

戻ってきた達弥の手には2つの可愛らしい袋。

「何買ったの??」

とぼけたふりをして達也に尋ねた。

「ん?ペアリング。」

達弥はとても幸せそうな顔で私の質問に答えた。

やばい・・・にやけそう。

でも、達弥が次に発した言葉で、私の期待はあっさり打ち砕かれた。

「もうすぐ千紘の誕生日だろ??だから、さ。」

「あ・・・そういえば来週だったね。」

気分は一気に地の底まで墜ちた。

そうだよな。
じゃなかったら女物のアクセサリショップなんて行かないよね。普通・・・

「明後日土曜じゃん?アイツ一泊だけ帰ってくるんだってよ!」

そう言って嬉しそうに顔を綻ばせる。

私の胸はズキン、と痛んだ。

あーあ。私ってばバカみたい。
期待なんかしちゃってさ。
達弥は千紘しか見えてないのに。

「ほら、愛希。」

帰るぞ。と差し出された手。

昔からどんくさい私のことをいつも守ってくれる手は、今は何倍も力強くてあったかい。
断らなければと思うのに、体は言うことを聞かず、達弥の手を握り返した。

期待なんかしちやいけない。

自分に言い聞かせながら歩く。
つながれた手が火傷しそうなくらい熱い。

この時がずっと続けばいいのに。
そうってしまう。

鍵

エンジンの音とともにやってきたバスに乗り込む。
それと同時に離れてゆく温もり。

バスは思ったよりも空いていて、どこかガラんとた車内は私の心みたいな気がした。
寂しく思いながらも2人用座席に座る。
今は並んで座ることが少し辛い。

「あ、そうだ。愛希、これ。」

ガサゴソと紙袋を漁り、達弥が取り出したのは、

「っ！！それ・・・」

さっきの店で私が可愛いと言った鍵のモチーフのネックレスだった。

「今日、付き合わせちまっただろ？そのお礼。」

達弥は私の首の後ろに手を回し、ネックレスをかけてくれた。

吐息が当たりそうなほど近くて、心臓がバクバクとうるさい。

「に、似合う？変じゃない？」

離れていく彼の顔。
安堵と同時に寂しさを覚えた。
それを誤魔化すように問いかける。

「すっげえ似合ってるよ。」

無邪気に笑う彼にドキリとする。

ペアリングには及ばないけど、私のために買ってくれたネックレス。
きっと最初で最後だと思う。
アクセサリーを貰ってこんなに嬉しいはずなのに苦しいなんて。

目頭が熱くなる。
あなたは気づいてないでしょ？
私の気持ちなんて。

シャラ。達弥がかけてくれたネックレスを手で触ってみる。



アンティーク調の古びた金色の鍵。
取っ手の部分がハートになっていて恋の鍵みたいだ。

この鍵で、あなたの心を繋ぎ止めることが出来ればいいのに。

悩む夜更け

その夜。

お風呂から上がって部屋に戻ると、携帯のランプがチカチカと光っていた。
見ると千紘からのメールだった。

[今何してる?]

慌てて返事をする。
すると、すぐに返事が来た。

[お風呂だったんだーごめんね!!]

[ううん。大丈夫]

そこで私は思い出した。
千紘が明後日帰ってくることを。
同時に近づいてくる彼の顔も思いだし、首を振って頭の中から消した。

[そういえばさー、明後日帰ってくるんでしょ?]

[あのさ・・・愛希に相談があるんだけど。]

[なに? どうかした?]

[実はさ・・・達也と別れようと思って。]

え・・・?

絵文字も顔文字のない地味な文面。
それは、千紘が本気だと言うことを物語っていた。

なんで・・・?
そんな急に・・・

震える手で文字を打っていく。

[なんで??]

[今まで当たり前みたいに一緒にいたのに・・・今は全然会えない。達弥もどっか素っ気ないし・・・。
不安でしょうがないの。だから・・・]

この会話がメールでホント良かったと思う。
相手の顔を見ることはないし、自分の顔を見られることもない。

嘘偽りの言葉を文字にすることなんて簡単だから。

でも・・・私は、千紘に何も言えなかった。

千紘が苦しんでたなんて・・・

話題を変えて話を盛り上げようとしても、会話が續かない。

私は携帯をベッドに放り投げて寝っ転がった。

・・・自分がイヤになる。
大切な幼なじみ兼親友が悩んでいて、恋人と別れようとしているのに。
心のどこかで喜んでいる自分が。

考えるのを止めようと眼を閉じてみても上手に眠れない。

余計に頭の中でぐるぐると2人の顔が出てきて目が冴えてしまう。

明日どんな顔で達弥に会えばいい？

千紘は別れるつもりでいるだなんて、今日あんな幸せそうな笑顔見てたら言える訳ない。

せめて気を紛らわせようと、携帯を触っていたら3人で撮ったプリクラの画像が出てきた。

私、千紘、達弥。中学の入学式、3人で遊びに行ったとき。

いつだって達弥の横には千紘がいて、千紘の横には達弥がいて…。

交差する想い

ピピピピッピピピピッ。

昨日いつの間にか携帯片手に寝てしまっていたらしい。

色々と想いが混ざり合った私の頭の中とは真逆の晴れ渡った真っ直ぐな陽射しが窓から降り注いでいた。

「愛希——!!」

走ってくる達弥。

「おはよ愛希」

「・・・おはよ。」

いつも通りの朝。
いつも通りの達弥。

「どした？何か元気なくね？」

だけど私は違う。
じっと見つめる視線の先には、達弥の指にはめられたペアリング。

「ううん。何でもない。ほら！早くバス乗ろ？」

いつも通り2人用座席に座る。

「明日、千紘帰ってくるんだよな——!!」

千紘が帰ってくるのが嬉しいみたい。
すごいニコニコしてる達弥。
そうだよな。
滅多に会えないもんね。

「そうだね・・・」

ズキン。
胸がまた痛む。

頭の中で、昨日の千紘とのやりとりが浮かんでは消える。

「もし2人が別れたら」
そんなことを思ってしまった自分に腹が立つ。

2人が別れたって、達弥が私に振り向いてくれるとは限らないのに。
ブーッ、ブーッ。

静かなバスの中に、突然バイブ音が響いた。
ズボンのポケットから携帯を取り出す達弥。

「千紘からだ」

ディスプレイを見た瞬間、彼の顔がパッと明るくなる。
それとは逆に、私のテンションは地の底だ。

しかし、達弥の顔がふと曇ってしまった。
訝しく思った私は声をかける。

「・・・どうしたの？」

「・・・・・・・・千紘、来れなくなったって。」

そう言って、私に携帯を差し出してくる。

携帯の画面をのぞくと、
[成績落ちて、親に行っちゃダメって言われた・・・ごめん]
と、昨日の夜同様に、何の飾り気もない文章が綴られていた。

「リング・・・どうすっかな・・・・・・・・」

自分の指にはめたリングをいじりつつ、千紘にあげるはずだったリングの箱を取り出す。

達弥の顔は見てて痛々しいほどに、悲しそうに歪んでいる。
こんな天気の良い日に達弥の上にだけ雲がすっぽりかぶったみたいだ。
やり場のない気持ちからか、人差し指で何度も箱の上をポンポンと叩いている。

・・・・・・・・千紘。
達弥にこんな顔させるなんて。
なら、私が達弥を。

「・・・達弥!千紘は・・・!」

精一杯の笑顔

「俺・・・振られんのかな・・・」

続きを言う前に、達弥の声に遮られる。
達弥の声は・・・震えていた。

「達弥・・・？」

「それでも・・・っ」

荒々しく袖で目元をぬぐった達弥は、ニカッと満面の笑みを浮かべた。

「それでも、俺はアイツが好きなんだ。たとえ別れても、俺はアイツを忘れることは出来ない。
千紘は、もう俺の一部なんだ。自分の一部を切り離すなんて無理だろ？」

目元をかすかに赤くしたまま呟かれた言葉。

・・・・・・・・・・嗚呼、終わった。

毎朝の20分が終わると胸が苦しくて。

何度も諦めようとしたけど、出来なくて・・・！

また苦しくなって・・・

ずっと続いている無限のループ。

だけど・・・・・・・・・・

達弥の心の中には、千紘以外いなかった。

私が入る隙間は・・・・・・・・なかったんだ。

小学生の頃からの長い長い片思い。

やっと・・・・・・・・終わった。

やっと・・・・・・・・この恋を終わらせることが出来る。

封印なんかじゃなく、本当の「終わり」

「？愛希？降りるぞ？」

いつの間にか降りなければならぬ駅に着いたみたい。

達弥と私は席を立とうとした。

「そういえばさ・・・」

「ん？」

「このバスの終点って・・・電車の駅だよね・・・」

「え？ああ、うん。」

車内にアナウンスが響き、プシューッという音とともに扉が開いた。

「降りねえの？」

「降りるよ。」

「ほら。早く。」

「私、一人で学校行けるから。」

「はあ？」

「達弥は終点まで乗るの!!で、電車乗って千紘のそこに行っといでよ!!」

千紘のことを話題に出した瞬間に、達弥の顔が曇る。
私は気にせず一人でタッと、バスから飛び降りた。

「別れたくないんでしょ？行って2人の溝、埋めてきなさいよ!!男でしょ??」

ポカンとしていた達弥は、徐々に閉まる扉に我に返った。

「・・・・・・・・ありがとう。愛希。」

バスにエンジンがかかる。

窓越しにふっとほほえんでいた達弥。

走って行ってしまうバスに私は叫んだ。

「好き!!大好き!!達弥のこと、ずっと大好きだったよ!!」

春の陽射し

バスのエンジン音にかき消された私の叫び声。
この想いも一緒に、遠い町まで攫って行って。
二度と戻ってこないように。

シャラ。達弥にもらったネックレスが音を立てた。

この「鍵」は、私の想いの扉を開ける為の鍵だったのかもしれない。



見えなくなったバス。
同時に終わった片道20分の恋の時間。

けど、大丈夫。

くるりとバス停に背を向けて、まっすぐ歩き始める。

次に、あなたが隣にいるときには、ちゃんと吹っ切れてるから。

私は笑って待ってるよ。

2人がお揃いのペアリングをして、手をつないで、笑って戻ってくるのを。

足を止めて空を見上げる。

空には、私に迷いが無いみたいに、雲一つない。

いつかまた恋をしたとき、

今度こそ思いが届きますように・・・

空を見上げて、暖かい陽気に包まれながら、そっと願った。

あなたとの毎朝の20分間は、私にとって幸せでもあり、そして儂くもあった時間だったよ。

